通勤の朝

●九州学院高校教諭
中田　幸作

七日正月が過ぎて寒に入ると、寒さが本格的になる。

マフラーにオーバーを着こんで通勤するようになって、半袖シャツ一枚に太股（ふともも）をさらけだした半ズボンの子供の姿が目につく。

顔見知りの子に「お早う、寒なかや」と聞くと、「寒うなか。おっちゃんな頭の寒かっだろう」とやり返された。薄くなった頭を隠すため私がラシャの帽子を被っているからだ。中には「おいハゲとるとだろ」と飛びかかってくる子もいれば、天気予報の雨の日はこうもり傘の石突きで帽子を落そうとする子もいる。小二の女の子のくせに「ハゲブタ、アデランス」と毎朝のようにお早うがわりの憎たれ口をたたく子もいる。

その子たちがどの子も、十四日の朝はしめ飾りを下げてやってきた。憎たれ口の女の子も体の入ってしまいそうな大きなしめ飾りを両手で下げてやってきた。しめ飾りをカバンに下げ、手に青竹を持って来る子もいる。青竹にはアルミ箔（はく）で包んだ丸いものが針金で串（つ）るしてある。「今日は何や」と聞くと、「ドンドヤたん。おとなのくせにこがんとも知らんとか」と馬鹿にされた。ゆとりの時間が設けられてここ二・三年の間に小学校でのドンドヤが広まったとは聞いていたが、十四日に繰り上げとは気が付かなかった。この子たちの学校も始めたのだなと思いながら心の中で身構えた。いつもチビの手下を連れてくる元気者が、餅を下げた青竹の先をこちらに向けてやって来る。帽子を落すつもりのようだ。

ドンドヤといえばずいぶんと変わった。今のドンドヤはＰＴＡの親たちや教師たちが、孟宗竹（もうそうちく）や古材の購入、櫓組みから水の後始末までやってしまう。子供たちはドンドヤを見物し餅を焼く。中には危ないからと餅も焼かせてもらえない処もある。

戦争で中断される前までドンドヤは子供の行事だった。

昭和の初め玉名に生れた私の小さい頃は、十四日の昼から町内の家々を回って、門松やしめ飾りを集めてドンド小屋の代りの舟小屋に蔵（しま）った。しめ飾りにつけてある米や木炭を金に換えると、高等科生はリヤカーを引いて隣村に孟宗竹や藁（わら）を買いに行く。残りの下級生は門松、しめ飾り、するめ、餅、と整理して泊りの準備をする。隣りの下町の子供たちが門松やしめ飾りを略奪に来るかも知れないからである。買ってきた孟宗竹や笹竹（ささだけ）、藁を小屋に蔵いこんだら防御の電線を張り、水を入れたバケツを天井に吊るす。敵がこっそりやってきたら冷水を浴びせる仕掛けである。戦時下のドンドヤは戦争の陰を色濃く落していた。夜襲に備えて寝ずの番をしながら「ロシヤ、ヤバン国」と尻取り歌を歌って眠気をさました。

一夜明けるとドンド焼きである。菊水座裏の草っ原に穴を掘って、成績や書き初め藁束を括（くく）りつけた主柱の孟宗竹を立てる。それに笹竹を立てかけ、根もとに門松、しめ飾り、藁を積み上げる。その頃になって大人たちが小さい子を抱き、割竹に鏡餅を挟んでやってくる。ドンドヤは子供たちが取り仕切った。

昔がよいというわけではないが、今のようなお仕着せ文化の中では、創造の芽も工夫のエネルギーも奪われた子供たちのために考えてみる必要があるのではなかろうか。

私の身構えに気付いた相手は、青竹の先を空に向けて「オハヨウ」と頬（ほお）に笑いを浮かべて通り過ぎた。チビたちが「いま、いまっ」と叫んだ。その直後私の帽子は吹っ飛んで、「見えた見えた」という喚声があがった。

国栄えて山河なし？

●詩人
緒方　惇

牧歌的な理想郷にたとえられる古代ギリシアのアルカディア――そこは、高い山々で他の地方と隔絶された高原だという。

それにくらべると、私のアルカディアはぐっと身近か。内海に浮かぶ小島であった。とはいっても、そこへ実際によく行っていたのは、遥（はる）かなる学生時代。その後東京に住んだりナニヤカヤしたりで、つい一度も出かけたことがなかった。いまは海に大橋がかかった、宇土・三角町の戸馳島である。

ところが昨年の夏、三十数年ぶりに出かけた。なにしろ熊日が創刊四十周年記念事業として三角町と共催で、熊日学術調査団による「戸馳島古代遺跡発掘調査」を、一般公開で行うというのである。これまでにもここは、大きな貝塚が発掘されたりしていて、考古学的な関心をよぶところであったが、今回は小島のまた小島である丸子島の古墳と浜の洲貝塚の二カ所の発掘調査なのであった。そしてこの二カ所の辺りこそが、この島を私のアルカディアとする最も象徴的な場所だったのである。懐かしかった。これが行かずにおられようか…。

張り切って、夫にも日程を繰り合わせて貰い、私の姉もいっしょに三人連れで出かけた。張り切り過ぎたのか、戸締まりを入念にしたつもりが、泊まりがけから帰宅してふと我が家を見上げたら、なんと二階は窓を全部あけ放って洗濯物も出したまま、だった。

それはともかく、発掘見学の方は大収獲だった。丸子島では王子墓とみられる石組みがすでに幾つか掘り出されて、気球のカメラで上空から撮影していたし、貝塚では折しも、西日本で初めてという縄文後期の祭祀跡発見があった。そしてなにより、こういう現場でいつも驚くのだけれど、考古学関係の人々の発掘の手ぎわの、情熱と根気に支えられた入念さである。ことに今回は真夏の太陽が照りつける海辺だ。感動的でさえあった。

でもでも、私は深く悄気（しょげ）込んで帰ったのである。

風景が――私のアルカディアの風景が、なくなっていた。この戸馳には、私の叔父がいる。だからそもそも、戦後まもなくの学生時代、熊本市の下宿からしばしばやって来たりしたわけだけれど。そしてその叔父が今度の発掘現場になった古墳の丸子島の地権者であり、調査団のメンバーのひとりでもあったのだけれど。樹木に蔽（おお）われ神秘的で、周囲に魚影が濃かった丸子島は、樹らしい樹とてなく、しかもなぜか小っちゃくなっていた。浜の洲貝塚のある若宮海水浴場の辺りは、若宮神社のお社を囲んで、波打ち際まで見事な松がそびえていた。その松の根方に寝そべって見た不知火や、降るようだった万天の星など、まさに〝わが青春のアルカディア〟の重要場面なのだけれど、松がなくなっていた。バンガローと車に埋めつくされて、海さえ見えなかった。

しかしほんとうは、戸馳島の三十数年間での変わりようなど、嘆くほどのことはないのだと思う。橋で陸つづきになり、舗装道路が出来て、いとこたちはみな自家用車で通勤、いきいきしていた。そしていまもって人々のみる戸馳は〝やすらぎの島〟だ。

ただ私は、戸馳のことから思いが移って、もっと開発が急激な日本のそこかしこを思い出した。そしてあのころ、母国に帰りついた人々が思わず涙して口にしたのが、杜甫の詩の一節『国破れて山河あり』だったのを思い出した。いま、『国栄えて山河なし』ではないといいけれど。